

82 エミール・ガレと高島北海（2021年10月7日）

19世紀末から20世紀初めにかけて、ヨーロッパやアメリカではアール・ヌーヴォーが流行しました。アール・ヌーヴォーは、花や植物といった自然をモチーフにし、曲線を使ったデザインが特徴で、建築、家具調度品や宝飾などの工芸品、絵画やグラフィック・アートなど多くの分野で新たな潮流を生み出しました。

アール・ヌーヴォーの代表的な人物と言えば、エミール・ガレ（1846-1904年）が挙げられます。ガレは、ドイツに近いフランス北東部のナンシーで、ガラス工芸やファイアンス焼きの工場経営者の家に生まれました。ナンシーには、アール・ヌーヴォーの芸術家や職人が集まり、ガレによって「ナンシー派（*école de Nancy*）」が結成されました。今でもナンシーの街中にはアール・ヌーヴォー様式の建物が多く残り、アール・ヌーヴォーの中心地であったことが伺えます。



Soufflage du verre
吹きガラス

ガレのガラス工芸品は日本でも有名ですが、ガレは家具職人でもありました。ガレの作品は、パリではオルセー美術館、装飾芸術美術館、パリ市立近代美術館やパリ工芸博物館など複数の美術館で、ナンシーではナンシー派美術館で目にすることができます。

ガレの作品には、日本的なデザインが取り入れられているものが数多くあります。アール・ヌーヴォーが起こる少し前にはジャポニスムのブームもあり、フランスに日本文化が入り始めていました。しかし、それだけではなく、ある日本人との出会いが、ガレの作風に大きな影響を与えました。その日本人とは、画家の高島北海です。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

高島北海（本名は得三）（1850-1931）は、明治政府の工部省に入省し、明治5年（1872年）から4年間、兵庫県にある生野銀山の鉱山学校に赴任しました。そこで、お雇い外国人として同校の技師長を務めていたジャン＝フランソワ・コワニエから、フランス語と地質学や植物学を学びました。明治17年（1884年）に政府から派遣されて、万国森林博覧会に参加するためにイギリスへ渡りました。ヨーロッパ各地の森林を視察した後、ナンシー水利林業学校（現在のフランス国立農村工学・河川・森林学校 École Nationale des Eaux et Forêts : ENEF）に3年間在学して、植物地誌学を学びました。高島は、明治政府の技官として森林行政に携わりながら、植物学に対する深い造詣を活かし、高い写生技術を用いた山岳風景画を描きました。

ガレは、高島から日本の植物を始めとした日本に関する知識を得たと言われています。高島との交流がきっかけとなって、水墨画のようなぼかし表現を伴う黒褐色のガラスを生み出しました。

アール・ヌーヴォーという時代に生きたガレが、一人の日本人留学生との交流を通じた異文化と出会ったことで、今も私たちを魅了するガレの素晴らしい作品が生まれたと言えるでしょう。

